

## 韓国中学生の性行動の実態と関連要因

リ 李      キュヨン 圭英\*      ソン 宋      スンファン 昇勳\*

**目的** 本研究の目的は、青少年健康行動オンライン調査のデータを利用して、韓国中学生の性行動の実態と関連要因を把握することである。

**方法** 第9次（2013年）青少年健康行動オンライン調査のデータを利用して二次分析を行った。全体の参加者72,435人のうち、中学生の36,530人のデータを本研究の分析対象とした。中学生の性行動の実態を把握するためにコンプレックスサンプル頻度分析とコンプレックスサンプル $\chi^2$ 分析を利用し、性行動の関連要因を明らかにするために、コンプレックスサンプルロジスティック回帰分析を行った。

**結果** 性交経験のある生徒は全体の3.8%であり、男子5.0%、女子2.5%と男子の経験率が女子より有意に高かった。性行動の関連要因としては、男子においては、経済状況が高いと認識する者、親戚と一緒に住んでいる者、アルバイト経験のある者、外国人の父をもつ者、現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用、うつ経験がある者ほど性交を経験する可能性が高かった。女子においては、1年生、経済状況が高いと認識する者、経済状況が低いと認識する者、親戚と一緒に住んでいる者、保育施設に住んでいる者、アルバイト経験のある者、外国人の父、外国人の母をもつ者、現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用の経験がある者ほど性交を経験する可能性が高かった。

**結論** 韓国においても中学生の性行動は喫煙や飲酒、薬物乱用、精神保健の問題など他の健康問題と密接な関連があることが確認され、中学生の性的健康のためのアプローチは性という断片の問題を超え、精神的な健康及び健康な生活習慣の改善にも着目した包括的アプローチが有効であると考えられる。

**Key words** : 韓国, 中学生, 性行動, 危険行動

日本公衆衛生雑誌 2015; 62(11): 662-671. doi:10.11236/jph.62.11\_662

### I 緒 言

青少年期における早期の性行動は、望まない妊娠や妊娠中絶、性感染症の罹患などにつながる危険性が高い行動である<sup>1-3)</sup>。また、性行動自体が健康問題を引き起こすだけでなく、喫煙、飲酒、薬物乱用といった他の危険行動も伴うことによって、さらに深刻な精神的、身体的、社会的問題が生じる<sup>1)</sup>。このような青少年期の早期の性行動を予防するためには、性行動が活発化する前の段階において適切な働きかけを行うことが重要であり、学校教育の果たす役割は大きい<sup>2)</sup>。

韓国青少年の健康行動について調べた大規模調査<sup>4)</sup>によれば、青少年の性交経験率は中学生1.5%、高校生4.7%であり、高校生になるにつれ性交経験

率が上昇していることが明らかになっている。また同調査は、性交経験のある中学生は少数であるものの、性に関する知識の不足のために望まない妊娠に至るケースが高校生より多いと指摘している。さらに、16歳以前の性交経験は、成人になってより多くの性パートナーをもつことや、性交時にアルコールや薬物を使用すること、性感染症に罹患するリスクを高めることなどに関連があること<sup>3,5,6)</sup>を考慮すると、中学生の時期に、早期の性交開始を予防するための教育プログラムを実施することが重要であると考えられる。そして、そうした教育プログラムを開発するためには、まず中学生の性交開始にかかわる要因を明らかにする必要がある。

青少年の性行動に影響を及ぼす要因に関する日本や諸外国の先行研究によれば、個人要因として、性別<sup>2,7)</sup>や学年<sup>2,8)</sup>、喫煙<sup>2)</sup>や飲酒<sup>2)</sup>、薬物乱用<sup>2)</sup>といった他の危険行動の経験、セルフエスティームをはじめとするライフスキル<sup>2,8)</sup>や自己効力感<sup>2,8,9)</sup>といった心理社会的要因などが、性行動の関連要因として挙

\* 中央大学赤十字看護大学, 韓国  
責任著者連絡先: 156-756 韓国ソウル特別市銅雀区  
黒石路84  
中央大学赤十字看護大学, 韓国 宋 昇勳

げられている。環境要因としては、親子関係<sup>9,11)</sup>や社会経済的地位<sup>7)</sup>、父母の学歴<sup>7)</sup>、父母のモニタリング<sup>10,11)</sup>、父母との同居<sup>7)</sup>などといった家族要因、友人関係<sup>12)</sup>や性交経験のある友人からのプレッシャー<sup>9)</sup>といった友人要因、学校適応<sup>7)</sup>、成績<sup>7)</sup>といった学校要因、メディアの性情報への接触<sup>13)</sup>といったメディア要因が挙げられている。

韓国の研究においても、個人要因として、性に対する寛容的な態度<sup>14,15)</sup>、刺激追及<sup>14~16)</sup>やうつ<sup>17)</sup>といった個人的特性、喫煙<sup>17)</sup>や飲酒<sup>17)</sup>といった他の危険行動、家出<sup>15,17)</sup>などの逸脱行為が、環境要因として、学校成績<sup>16)</sup>、父母との同居<sup>16)</sup>、インターネット上の性情報への接触<sup>17)</sup>などが青少年の性行動に影響を及ぼす要因として挙げられている。しかし、韓国におけるこれらの先行研究は高校生を対象としたものが多く、中学生の性行動について検討を行った研究はまだ少ない現状である<sup>17)</sup>。

そこで本研究では、韓国の教育部（日本の文部科学省に当たる）、保健福祉部（保健衛生、医療行政、社会保障などに関する事務を遂行する行政機関）、疾病管理本部が青少年の健康行動の現状と推移を把握するために2005年から毎年実施している青少年健康行動オンライン調査のデータを利用して、中学生の性行動の実態を把握し、その関連要因を確認することによって、青少年の性にかかわる危険行動を早期に予防するのに有効なプログラムを開発するために必要な基礎資料を得ることを目的とする。

## II 研究方法

### 1. 対象者とデータ

本研究では、第9次（2013年）青少年健康行動オンライン調査<sup>18)</sup>のデータを利用して二次分析を行った。青少年健康行動オンライン調査のデータの利用希望者は、青少年健康行動オンライン調査の公式ホームページ（<http://yhs.cdc.go.kr>）にあるデータの要請フォームを利用して申請者の情報や資料の利用目的などを提出し、承認を得てデータをダウンロードすることができる。

青少年健康行動オンライン調査の対象者は全国の中学校1年生から高校3年生であり、第9次の調査では、2012年4月時点の全国の中、高校生を母集団として標本抽出を行った。標本抽出は母集団の層化、標本配分、標本抽出の3段階に分けて行った。母集団の層化の段階では、標本誤差を最小限にするために43の地域群と学校級（中学校、普通科高校、専門科高校）を層化変数として母集団を129層に分けた。標本配分段階では、標本の大きさを中学校400校、高校400校にした後、16の市・道別に中高校

をそれぞれ5校ずつ優先的に配分し、層化変数別母集団と標本の構成比が一致するように市・道、都市規模（大都市、中小都市、郡地域）、地域、学校タイプ（男子校、女子校、男女共学）によって学校数を配分した。標本抽出は層化多段抽出法で行い、1次抽出単位は学校、2次抽出単位はクラスとし、標本学校から学年別1クラスを無作為に抽出した。最終的な調査参加者は、調査参加に同意しなかった1校の学校と生徒および当日欠席者を除いた799校72,435人（参加率96.4%）であった。そのうち、中学生の36,530人のデータを本研究の分析対象とした。性・学年別人数を表1に示す。

なお、本研究は中央大学の倫理委員会で審査免除の判断が下された（承認日2014年12月16日、承認番号：1041078-201412-HRSB-190-01）。

### 2. 調査方法

青少年健康行動オンライン調査はコンピュータを利用した自記入式オンライン調査である。調査は、2013年6~7月に、各対象学校のインターネットが利用可能なコンピュータ室で行った。選定された生徒は無作為に配置された席で直接コンピュータを使って回答した。担当の教師は各生徒に生徒用案内文を配付し、調査の目的や必要性、方法などを説明した。その後、生徒は案内文に印刷されている個人番号を使用してホームページに接続し、調査への同意ページにチェックをしてから回答を行った。生徒用案内文や調査のホームページには、調査に同意しない場合は回答しなくてもいいことが明記されており、調査実施者用手引書においても、調査クラスの担任教師は入室しないことや調査中に机間巡視をしないことなどの注意事項が明記されるなど、倫理上の配慮が行われている。

### 3. 調査項目

第9次青少年健康行動オンライン調査は、学年や経済状況等の基本的事項、喫煙、飲酒、肥満およびダイエット行動、身体活動、食習慣、事故予防および安全意識、性行動、精神保健、薬物、などの15領域、102の指標、126項目で構成されている。各領域別質問項目は疾病管理本部健康栄養調査課が開発し、13分派の諮問委員会の妥当性と信頼性に関する調査

表1 分析対象者の性・学年別人数  
人 (%)

	1年生	2年生	3年生	計
男子	6,411(52.6)	6,261(51.7)	6,249(51.1)	18,921(51.8)
女子	5,788(47.4)	5,852(48.3)	5,969(48.9)	17,609(48.2)
計	12,199(100)	12,113(100)	12,218(100)	36,530(100)

が行われ、最終的に採択された。

本研究では、全体の指標の中から性行動、基本的事項、喫煙、飲酒、薬物乱用経験（以下、危険行動経験）、精神保健の項目を利用した。

性行動関連項目は性交経験、最初の性交経験の時期、飲酒後の性交経験、性感染症の罹患経験、性交時の避妊の項目を利用した。性交経験に関しては、「性交経験がない」、「異性との性交経験がある」、「同性との性交経験がある」の選択肢から該当するものをすべて選ぶようにしており、性交の定義はとくになかった。本研究では、「異性との性交経験あり」と「同性との性交経験あり」のいずれかの経験のある者を性交経験者と定義した。さらに分析の際には「両性との性交経験」を追加した。最初の性交経験の時期に関しては「小学校卒業前」と「中学校入学後」とに分けた。性交時の避妊についての選択肢は「いつも避妊した」、「だいたい避妊した」、「ときどき避妊した」、「まったく避妊しなかった」であった。この質問に「避妊をした」と回答した者に対しては別の質問を設け、主に使用した避妊方法について尋ねたが、本研究では避妊方法については分析しなかった。飲酒後の性交経験と性感染症の罹患経験に関しては、その経験の有無を尋ねた。

基本的事項に関しては、学年と学業成績、主観的経済状況（以下、経済状況）、居住形態、アルバイトの経験、父と母の国籍についても尋ねた。学業成績と経済状況に関しては、それぞれ5段階の選択肢（上、中の上、中、中の下、下）を、上、中、下の3段階にカテゴリ化した。居住形態は、「家族と一緒に住んでいる」、「親戚と一緒に住んでいる」、「下宿、一人暮らし、寮に住んでいる」、「保育施設に住んでいる」の選択肢をそのまま使用した。アルバイトについては、その経験の有無を尋ねた。父と母の国籍は「韓国」と「外国」に分類した。

危険行動の経験に関しては、現在喫煙（最近1か月間の喫煙経験）、現在飲酒（最近1か月間の飲酒経験）、生涯薬物乱用の3項目について尋ねた。

精神保健に関しては、うつと自殺念慮、自殺企図の3項目について、過去1年間における経験の有無を尋ねた。

#### 4. 分析方法

健康行動オンライン調査では代表性のある標本を得るため、層化、標本配分、多段階標本抽出の段階を経たコンプレックスサンプルデザインを用いた。さらに、調査に参加した生徒のデータが韓国の青少年を代表するように重み付けした。重み付けは抽出率、応答率、母集団の人口構造を反映して算出した。抽出率の逆数と応答率の逆数をかけた後、性

別、学校種別、学年別重み付けの合計が2013年4月時点の全国の中高校生の数と同じように重み付けを調整した。

なお、資料の分析は疾病管理本部の資料分析指針に従って行った<sup>19)</sup>。上述したように、データはホームページからダウンロードすることができるが、現在はSPSSとSASの二つのデータフォーマットだけを提供している。本研究ではSPSS for Windows 21.0を利用し、コンプレックスサンプルデザインを考慮した分析を行った（SASにおいては、proc survey モジュールを使用）。その理由は、単純ランダムサンプリングしたデータとして分析を行った場合は、推定量にバイアスが発生し、推定量の分散を過小推定する恐れがあるためである。

まず、男女別中学生の性行動の実態を把握するために、コンプレックスサンプル頻度分析とコンプレックスサンプル $\chi^2$ 分析を実施した。次に、中学生の性行動の関連要因を明らかにするために、基本的事項、危険行動、精神保健別に性交経験率を求めた。割合の差の検討にはコンプレックスサンプル $\chi^2$ 分析を行った。さらに、単変量分析において有意である項目を独立変数として、多変量のコンプレックスサンプルロジスティック回帰分析を実施した。

なお、統計上の有意水準は5%とした。

### III 研究結果

#### 1. 中学生の性行動

性交経験のある生徒は1,364人と全体の3.8%であった。性別にみると、男子937人（5.0%）、女子427人（2.5%）で男子の経験率が女子より有意に高かった。

表2は性交経験のある者を対象に詳しい性行動を男女別に示したものである。男女間で大きな差はみられなかった。異性との性行動が最も多く約70%を占めており、同性との性交経験を報告した者が約15%、両方との関係を報告した者が約13%であった。初めて性交を経験した時期は男女ともに約60%が小学校卒業前に経験したと回答した。飲酒後の性交経験がある者は男子が約18%、女子が約17%であった。性交時の避妊に関しては、男女ともに約70%が避妊をしなかったと回答した。性感染症に罹患した経験のある者は約10%であった。

#### 2. 性交経験の関連要因

表3には、男子の基本的事項、危険行動、精神保健と性交経験との関連を示した。

コンプレックスサンプル $\chi^2$ 分析の結果、経済状況、居住形態、アルバイト経験、父の国籍、現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用、うつ、自殺念慮、自殺企

表2 性交経験者の性交相手, 初性交時期, 飲酒後の性交経験, 性交時の避妊, 性感染症の罹患経験 (n=1,364)

		男子	女子	P値*1	
		(n=937)	(n=427)		
		n (%)	n (%)		
性交経験	異性との関係	677(72.3)	309(72.4)	0.87	
	同性との関係	135(14.4)	66(15.5)		
	両方との関係	125(13.3)	52(12.2)		
初性交時期	小学校卒業前	570(64.3)	243(59.1)	0.36	
	中学校入学後	317(35.7)	168(40.9)		
飲酒後性交		153(16.3)	69(16.2)	0.68	
性交時の避妊	いつもした	185(19.7)	73(17.1)	0.49	
	大体した	41( 4.4)	23( 5.4)		
	たまにした	37( 3.9)	23( 5.4)		
	まったくしなかった	674(71.9)	308(72.1)		
性感染症罹患あり		88( 9.4)	42( 9.8)	0.75	

\*1: コンプレックスサンプル  $\chi^2$  分析

図において統計的有意差が認められた。そして、経済状況においては、経済状況が高いと認識している者の性交経験率が最も高く、中間だと認識している者の経験率が最も低かった。居住形態においては、保育施設に住んでいる者の性交経験率が最も高く、次いで、下宿や一人暮らし、寮に住んでいる者、親戚と一緒に住んでいる者、家族と一緒に住んでいる者の順に性交経験率が高かった。アルバイト経験のある者がいない者より、父の国籍が外国の者が韓国の者より性交経験率が高かった。現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用、うつ、自殺念慮、自殺企図においては、いずれも経験者の性交経験率が高かった。

次に多変量のコンプレックスサンプルロジスティック回帰分析にて変数間の影響を調整したところ、経済状況、居住形態、アルバイト経験、父の国籍、現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用、うつにおいて有意差が認められた。そして、経済状況が高いと認識する者は中間だと認識する者より1.8倍 (95%信頼区間, 以下95%CI: 1.1-3.1), 親戚と一緒に住んでいる者は家族と一緒に住んでいる者より4.6倍 (95%CI: 1.3-16.1), アルバイト経験のある者は経験のない者より1.9倍 (95%CI: 1.3-2.7), 外国人の父をもつ者は韓国人の父をもつ者より6.5倍 (95%CI: 1.6-26.1), 現在喫煙の経験がある者は経験のない者より2.2倍 (95%CI: 1.5-3.2), 現在飲酒の経験がある者は経験のない者より1.5倍 (95%CI: 1.1-2.0), 薬物乱用の経験がある者は経験のない者より4.4倍 (95%CI: 1.9-10.1), うつ経験がある者は経

験のない者より1.9倍 (95%CI: 1.3-2.8), 性交を開始するリスクが高かった。

表4には、女子の基本的事項、危険行動、精神保健と性交経験との関連を示した。

女子では、コンプレックスサンプル  $\chi^2$  分析の結果、学校成績を除くすべての項目において有意差が認められた。そして、1年生の経験率が最も高く、学年が上がるにつれ経験率が低くなった。経済状況においては、経済状況が高いと認識している者の性交経験率が最も高く、中間だと認識している者の経験率が最も低かった。居住形態においては、保育施設に住んでいる者の性交経験率が最も高く、次いで、下宿や一人暮らし、寮に住んでいる者、親戚と一緒に住んでいる者、家族と一緒に住んでいる者の順に性交経験率が高かった。アルバイト経験のある者がいない者より、父と母の国籍が外国の者が韓国の者より性交経験率が高かった。現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用、うつ、自殺念慮、自殺企図においては、いずれも経験者の性交経験率が高かった。

多変量のコンプレックスサンプルロジスティック回帰分析の結果において有意差が認められた項目は、学年、経済状況、居住形態、アルバイト経験、父の国籍、母の国籍、現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用であった。そして、1年生は3年生より2.5倍 (95%CI: 1.8-3.4), 経済状況が高いと認識する者は中間だと認識する者より1.6倍 (95%CI: 1.1-2.3), 経済状況が低いと認識する者は中間だと認識する者より0.7倍 (95%CI: 0.5-0.9), 親戚と一緒に住んでいる者が家族と一緒に住んでいる者より5.4倍 (95%CI: 2.1-13.6), 保育施設に住んでいる者は家族と一緒に住んでいる者より7.9倍 (95%CI: 2.3-26.6), アルバイト経験のある者は経験のない者より2.4倍 (95%CI: 1.6-3.8), 外国人の父をもつ者は韓国人の父をもつ者より5.3倍 (95%CI: 1.6-17.9), 外国人の母をもつ者は韓国人の母をもつ者より2.5倍 (95%CI: 1.1-5.7), 現在喫煙の経験がある者は経験のない者より3倍 (95%CI: 1.8-4.9), 現在飲酒の経験がある者は経験のない者より1.8倍 (95%CI: 1.0-3.0), 薬物乱用の経験がある者は経験のない者より10.4倍 (95%CI: 5.4-20.0), 性交を開始するリスクが高かった。

## IV 考 察

### 1. 中学生の性行動の実態

本研究の結果によれば、中学生の性交経験率は3.8%で、男子5.0%、女子2.5%と男子の経験率が女子より有意に高かった。

2005年より毎年実施している青少年健康行動オン

表3 男子における一般的事項, 危険行動, 精神保健と性交経験との関連

(n=937)

		n (%)	P値*1	OR*2	95%CI*3	P値*4		
学年	1年生	346( 5.4)	0.51					
	2年生	296( 4.7)						
	3年生	295( 4.7)						
学校成績	上	336( 4.7)	0.18					
	中	232( 4.8)						
	下	369( 5.4)						
経済状況	上	442( 5.7)	<0.001	1.81	1.06-3.08	0.03		
	中	334( 4.0)		1				
	下	161( 5.6)		0.92	0.65-1.31	0.65		
居住形態	家族と	845( 4.6)	<0.001	1				
	親戚と	31(15.0)		4.58			1.30-16.1	0.02
	下宿, 寮	29(17.7)		0.88			0.14-5.48	0.89
	保育施設	32(25.8)		0.74			0.12-4.62	0.74
アルバイト	ない	760( 4.3)	<0.001	1				
	ある	177(13.2)		1.86			1.30-2.65	0.001
父の国籍	韓国	832( 4.6)	<0.001	1				
	外国	17(39.5)		6.51			1.63-26.1	0.01
母の国籍	韓国	817( 4.6)	0.07					
	外国	16( 7.7)						
現在喫煙	ない	579( 5.6)	<0.001	1				
	ある	358(14.9)		2.15			1.46-3.18	<0.001
現在飲酒	ない	510( 4.6)	<0.001	1				
	ある	427(11.9)		1.47			1.06-2.04	0.02
薬物乱用	ない	851( 4.6)	<0.001	1				
	ある	86(38.4)		4.38			1.91-10.1	0.001
うつ	ない	587( 4.0)	<0.001	1				
	ある	350( 8.2)		1.91			1.30-2.80	0.001
自殺念慮	ない	707( 4.3)	<0.001	1				
	ある	230( 9.4)		0.72			0.42-1.25	0.24
自殺企図	ない	817( 4.5)	<0.001	1				
	ある	120(19.9)		1.75			0.76-4.03	0.19

\*1: コンプレックスサンプル  $\chi^2$  分析 \*2: オッズ比 \*3: 95%信頼区間

\*4: 多変量のコンプレックスサンプルロジスティック回帰分析

ライン調査の最近5年間の結果をみると, 中学生の性交経験率は2008年2.2%(男子2.8%, 女子1.6%), 2009年2.2%(男子2.8%, 女子1.5%), 2010年2.5%(男子3.2%, 女子1.9%), 2011年2.3%(男子3.0%, 女子1.5%), 2012年2.1%(男子2.5%, 女子1.6%)と大きな変化はなかった。しかし, 2013年度の結果では男女ともに急激に増加していることがわかる。とくに, 中学校1年生の性交経験率が高くなり, 全体の経験率が増加している。

本調査において中学生, とりわけ1年生の性交経験率が高い理由については現時点では明確ではない。一つ考えられる仮説としてスマートフォンの普及による性的コンテンツへの接触の増加が挙げられる。メディア, とりわけインターネット上の性的コンテンツへの接触は青少年の性に対する好ましくない態度の形成や性行動と関連があることが明らかになっている<sup>13,20,21</sup>)。たとえば, 宋ら<sup>13</sup>)が行った縦断研究の結果によれば, 2年時のインターネット上の

表4 女子における一般的事項, 危険行動, 精神保健と性交経験との関連

(n=427)

		n (%)	P値* <sup>1</sup>	OR* <sup>2</sup>	95%CI* <sup>3</sup>	P値* <sup>4</sup>
学年	1年生	186( 3.2)		2.45	1.77-3.38	<0.001
	2年生	120( 2.1)	<0.001	1.16	0.81-1.66	0.42
	3年生	121( 2.0)		1		
学校成績	上	134( 2.1)				
	中	107( 2.3)	0.14			
	下	186( 2.9)				
経済状況	上	174( 3.0)		1.61	1.12-2.30	0.01
	中	167( 1.9)	<0.001	1		
	下	86( 3.0)		0.67	0.51-0.86	0.002
居住形態	家族と	376( 2.2)		1		
	親戚と	15( 9.9)	<0.001	5.35	2.11-13.6	<0.001
	下宿, 寮	11(13.8)		4.66	0.65-33.2	0.12
	保育施設	25(31.3)		7.89	2.34-26.6	0.001
アルバイト	ない	364( 2.2)	<0.001	1		
	ある	63( 5.7)		2.43	1.55-3.81	<0.001
父の国籍	韓国	366( 2.2)	<0.001	1		
	外国	10(29.4)		5.33	1.59-17.9	0.01
母の国籍	韓国	355( 2.1)	<0.001	1		
	外国	15( 6.8)		2.49	1.08-5.74	0.03
現在喫煙	ない	319( 3.2)	<0.001	1		
	ある	108(15.2)		3.00	1.82-4.93	<0.001
現在飲酒	ない	244( 2.5)	<0.001	1		
	ある	183( 7.5)		1.76	1.03-3.00	0.04
薬物乱用	ない	383( 2.2)	<0.001	1		
	ある	44(31.9)		10.4	5.37-20.0	<0.001
うつ	ない	191( 1.7)	<0.001	1		
	ある	236( 3.8)		1.67	0.88-3.15	0.12
自殺念慮	ない	258( 1.9)	<0.001	1		
	ある	169( 4.3)		1.18	0.62-2.23	0.61
自殺企図	ない	332( 2.0)	<0.001	1		
	ある	95( 7.6)		1.46	0.78-2.74	0.23

\*<sup>1</sup>: コンプレックスサンプル  $\chi^2$  分析 \*<sup>2</sup>: オッズ比 \*<sup>3</sup>: 95%信頼区間\*<sup>4</sup>: 多変量のコンプレックスサンプルロジスティック回帰分析

性的コンテンツへの接触は3年時の性交開始の予測要因であった。そして、スマートフォンの普及によりこのようなインターネット上の性的コンテンツに接触しやすくなったのではないかと考えられる。

韓国青少年のスマートフォン所持率は、2010年に約6%であったが、2011年には約36%、2013年には約80%に増加している<sup>22)</sup>。同報告書<sup>22)</sup>は、小学生の携帯電話の普及率が毎年急激に増加していると報告し、スマートフォンを含む携帯電話の普及が青少年

の性的コンテンツへの接触をしやすくしていると指摘している。また、性的コンテンツに接触したことがある者は16.1%と2011年の調査より約3.5倍増加しており、その理由の一つとしてスマートフォンの普及を挙げている<sup>22)</sup>。

以上のことを考えると、スマートフォンの普及により性的コンテンツに早く接触した小学生の性行動が活発になったのではないかと考えられる。

## 2. 中学生の性行動の関連要因

本研究の結果によれば、中学生の性行動に影響を及ぼす要因として、学年、経済状況、居住形態、アルバイト経験、父の国籍、母の国籍、現在喫煙、現在飲酒、薬物乱用、うつが挙げられた。

まず経済状況が中学生の性行動に影響を及ぼす要因として挙げられた。ノルウェーの青少年を対象とした Valle ら<sup>7)</sup>の研究によれば、男子において親の社会的地位が高いもしくは低い場合に、16歳未満の青少年の性交経験が高くなるU字形を示している。韓国においても同様の結果が報告されているが<sup>23)</sup>、この結果について Kim ら<sup>23)</sup>は経済水準が高い家庭は中間程度の家庭より性に対して開放的ではないかと推測している。また、経済水準が低い家庭では、生計維持などの理由で子どもの行動についてコントロールが難しいからと説明している。一方、女子のみにおいて経済状況の低さが性行動の関連要因として挙げられた。この点については、明確ではないが、男子の方がデートの費用を多く負担する文化と関連があるのではないかと考えられる。しかし、米国の調査<sup>24)</sup>では、社会経済状況と性行動には関連がないという結果も報告されており、今後さらに検討が必要だと考えられる。

居住形態も性行動に影響を及ぼすことが確認された。韓国の先行研究<sup>23)</sup>においても家族と一緒に住んでいる者の性交経験率が一人暮らしをしている者より有意に低かった。その結果について Kim ら<sup>23)</sup>は、家族と一緒に住んでいる者の方が家族から行動などを統制されるため性交経験率が低いと説明している。一方、女子のみにおいて保育施設に住むことが性行動に影響を及ぼしていた。しかし、先行研究では家族との同居の有無のみを検討した研究がほとんどであり、保育施設への居住の影響の男女差を検討した研究はない。そのため本研究の結果だけで結論付けるのは難しい。今後、この要因と関連があると考えられる仲間要因をあわせて検討し、保育施設への居住の影響を明確にする必要がある。

さらに、親の国籍もリスク要因であることが明らかになった。親の国籍が青少年の性行動に影響を及ぼす理由についてはいくつかの説明が可能である。まず、多文化家庭という変数が直接性行動に影響を及ぼすというより、そのような家族環境により青少年のセルフエスティームが低くなり、問題行動につながったのではないかと考えられる。多文化家庭の青少年の問題行動を検討した Choi ら<sup>25)</sup>の研究によれば、セルフエスティームと韓国語のレベルが高いほど問題行動は少なくなった。Park ら<sup>26)</sup>も児童のセルフエスティームが高く、家族関係を肯定的に評

価するほど非行行動が減少したと報告し、外見的な多文化家庭という変数より、個人の心理的な要因が重要であると指摘している。

親の国籍が青少年の性行動に影響を及ぼす理由についてもう一つの解釈は、多文化家庭の経済的困難による教育支援の不足が挙げられる。たとえば、多文化家庭の児童の心理社会的適応について検討を行った Kim<sup>27)</sup>の研究によれば、多文化家庭の児童は教育と関連して親の十分な支援を得ることができず、学業遂行とかかわるストレスが多く、そのため学校生活への適応問題に否定的な影響を及ぼしている。

一方、女子においてのみ母の国籍が性行動の関連要因として認められたことに関しては、青少年の問題行動における家族要因の男女差で説明ができる。すなわち、女子の方が男子より母と過ごす時間が長いし、その影響も大きい<sup>28)</sup>、母親が韓国の性文化や仲間文化に対して適切なアドバイスができない場合問題行動につながる可能性がある。Shin<sup>29)</sup>も女子学生の性非行は男子学生より家族の影響を受けやすいと報告している。

喫煙、飲酒、薬物乱用といった危険行動やうつが性行動と関連があることも再確認された。性交経験と他の危険行動の間に関連があることは多くの先行研究において報告されており、多くの研究者がその理由について説明をしている。たとえば、川畑ら<sup>2)</sup>はこれらの危険行動のうち幾つかは同一状況で起こる可能性があるという。または、比較的社会的寛容度が高いと青少年が認知する危険行動から始まって、次第に寛容度が低いと認知する危険行動に進んでいくのではないかと、あるいはまた、社会的規範に反する行動をとる青少年は共通して、人間関係に伴う不安や孤独感、低いセルフエスティームなど、深刻な心理社会的問題を抱え、そうした不快な気分から逃れるために様々な危険行動をとってしまうと説明している。Jessor<sup>30)</sup>も問題行動理論で、このような思春期の青少年に顕著に現れる問題行動は不安を解消し、他人から愛され、認められたい気持ちと自分が価値のある人間であることを感じたい欲求を満たすための合理的な行動であると説明する。

一方、男子のみにおいてうつ状態が性行動の関連要因として挙げられたが、この結果も先行研究と一致していない。たとえば、Heritage Foundation<sup>31)</sup>の報告によれば、青少年の性行動とうつの間には関連があり、男女ともに性交経験のある者の方が経験がない者に比べてうつ傾向が高いと報告している。そのため、今後さらに検討が必要であると考えられる。

以上の結果から、性的健康を含む青少年期の健康を増進するためには断片的な性教育プログラムでは

なく、喫煙や飲酒などの薬物誤乱用教育、健康的な生活習慣教育、あるいは、これらの行動に共通に働く心理社会的要因に焦点を当てた包括的な健康教育プログラムを実施する必要があると考えられる。

一方、本研究にはいくつかの限界がある。第一に、横断研究がもつ限界が挙げられる。本研究は全国の青少年を対象とした大規模調査で高い信頼性を持っているが、要因間の因果関係については論じることができない。また、1年生の性交経験が高かった本研究の結果が2013年度の一時的結果であることも考えられる。そのため、今後の調査の結果を引き続き注視する必要がある。第二に、青少年健康行動オンライン調査は行動に焦点を当てた調査であり、セルフエスティームや自己効力感など先行研究によって性行動との関連が報告されている心理社会的要因については調べていない。今後心理社会的要因に関する項目を取り入れた調査を実施することによって中学生の性行動に影響を及ぼす要因について包括的に検討する必要がある。第三に、本研究が自己申告によるものであることが挙げられる。とくに性に関する問題に敏感な社会的雰囲気のため、本研究の結果を解釈するにはそういうバイアスを考慮する必要がある。

## V 結 論

本研究では国レベルのデータである青少年健康行動オンライン調査の結果を利用して韓国中学生の性行動の実態とその関連要因について検討を行った。本研究の結果によれば、性交経験のある生徒は全体の3.8%であり、男子5.0%、女子2.5%であった。そして、韓国においても中学生の性行動は喫煙や飲酒、薬物乱用のような危険行動や精神保健の問題などの他の健康問題と密接な関連があることが確認され、中学生の性的健康のためのアプローチは性という断片の問題を超え、精神的な健康および健康な生活習慣の改善にも着目した包括的アプローチが有効であると考えられる。

本研究は、2014年度政府（未来創造科学部）の財源で韓国研究財団の研究助成を受け実施されたものである（No. NRF-2014R1A2A2A01005995）

This work was supported by the National Research Foundation of Korea (NRF) grant funded by the Korea government (MSIP)

(No. NRF-2014R1A2A2A01005995)

(受付 2014.12.16)  
(採用 2015. 8.28)

## 文 献

- 1) 川畑徹朗. ライフスキル形成を基礎とする性教育. 現代性教育研究月報 2008; 26(12): 1-6.
- 2) 川畑徹朗, 石川哲也, 勝野眞吾, 他. 中・高校生の性行動の実態とその関連要因: セルフエスティームを含む心理社会的変数に焦点を当てて. 学校保健研究 2007; 49(5): 335-347.
- 3) McNeely C, Shew ML, Beuhring T, et al. Mothers' influence on the timing of first sex among 14- and 15-year-olds. *J Adolesc Health* 2002; 31(3): 256-265.
- 4) 女性家族部. 2012年青少年有害環境接触総合実態調査. 2013. (in Korean)
- 5) Mathews C, Aarø LE, Flisher AJ, et al. Predictors of early first sexual intercourse among adolescents in Cape Town, South Africa. *Health Educ Res* 2009; 24(1): 1-10.
- 6) Drain PK, Smith JS, Hughes JP, et al. Correlates of national HIV seroprevalence: an ecologic analysis of 122 developing countries. *J Acquir Immune Defic Syndr* 2004; 35(4): 407-420.
- 7) Valle AK, Torgersen L, Røysamb E, et al. Social class, gender and psychosocial predictors for early sexual debut among 16 year olds in Oslo. *Eur J Public Health* 2005; 15(2): 185-194.
- 8) 宋 昇勲, 川畑徹朗, 今出友紀子, 他. 中学生の性行動とその関連要因に関する縦断研究: 心理社会的要因に焦点を当てて. 学校保健研究 2012; 54(1): 27-36.
- 9) Buhi ER, Goodson P. Predictors of adolescent sexual behavior and intention: a theory-guided systematic review. *J Adolesc Health* 2007; 40(1): 4-21.
- 10) Lenciauskiene I, Zaborskis A. The effects of family structure, parent-child relationship and parental monitoring on early sexual behaviour among adolescents in nine European countries. *Scand J Public Health* 2008; 36(6): 607-618.
- 11) Wight D, Williamson L, Henderson M. Parental influences on young people's sexual behaviour: a longitudinal analysis. *J Adolesc* 2006; 29(4): 473-494.
- 12) Pistella CL, Bonati FA. Communication about sexual behavior among adolescent women, their family, and peers. *Fam Soc* 1998; 79(2): 206-211.
- 13) 宋 昇勲, 川畑徹朗, 李 美錦, 他. インターネット上の性情報への接触が中学生の性行動に及ぼす影響に関する縦断研究. 学校保健研究 2013; 55(3): 197-206.
- 14) Kim KH, Kwon HJ, Chung HK. A study on the variables forecasting male adolescents' sexual intercourse. *Taehan Kanho Hakhoe Chi* 2004; 34(6): 954-963. (in Korean)
- 15) Kwon HJ, Kim KH, Choi MH, et al. A study on the variables forecasting female adolescents' sexual intercourse. *Journal of Korean Academy of Psychiatric and*

- Mental Health Nursing 2006; 15: 170-178. (in Korean)
- 16) Ryu EJ, Kim KH, Kwon HJ. Predictors of sexual intercourse among Korean adolescents. *J Sch Health* 2007; 77(9): 615-622.
- 17) Yu JO, Kim HH, Kim JS. Factors associated with sexual debut among Korean middle school students. *Child Health Nursing Research* 2014; 20(3): 159-167. (in Korean)
- 18) 教育部, 保健福祉部, 疾病管理本部. 第9回(2013年)青少年健康行動オンライン調査. 2014. (in Korean)
- 19) 疾病管理本部. 国民健康栄養調査資料分析指針. 2013. <http://cdc.go.kr/CDC/contents/CdcKrContent-View.jsp?cid=60942&menuIds=HOME001-MNU1130-MNU1639-MNU1748-MNU1754> (2014年12月1日アクセス可能) (in Korean)
- 20) 宋 昇勳, 川畑徹朗, 今出友紀子, 他. インターネット上の性情報への接触が青少年の性行動に及ぼす影響に関する予備的研究. *学校保健研究* 2012; 54(2): 152-161.
- 21) Braun-Courville DK, Rojas M. Exposure to sexually explicit Web sites and adolescent sexual attitudes and behaviors. *J Adolesc Health* 2009; 45(2): 156-162.
- 22) 女性家族部. 2013年青少年メディア利用実態調査. 2013. (in Korean)
- 23) Kim SJ, Moon ST, Kang HS. Factors influencing sexual behaviors of college students. *Journal of Korean Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing* 2011; 20(4): 434-443. (in Korean)
- 24) Santelli JS, Lowry R, Brener ND, et al. The association of sexual behaviors with socioeconomic status, family structure, and race/ethnicity among US adolescents. *Am J Public Health* 2000; 90(10): 1582-1588.
- 25) Choi WS. Personal characteristics, ethnic identity, experience of discrimination, self-esteem, and problem behavior of Korean-Japanese multicultural adolescents. *Korean Journal of Family Welfare* 2012; 17(2): 49-71. (in Korean)
- 26) Park MS, Song SR. Children's delinquency in multicultural families focusing on urban and rural areas. *Journal of Community Welfare* 2010; 6: 155-183. (in Korean)
- 27) Kim SG. The psycho-social adaptation among children of multi-cultural families. *Korean Journal of Youth Studies* 2011; 18(3): 247-272. (in Korean)
- 28) Siegel LJ, Welsh BC. *Juvenile Delinquency: Theory, Practice, and Law*. 10th Edition. Washington: Wadsworth Publishing, 2008.
- 29) Shin HS. The influence of family structure variables and family violence variables on hidden delinquency committed by students. *Family and Culture* 2005; 17(2): 63-88. (in Korean)
- 30) Jessor R. Problem behavior and developmental transition in adolescence. *J Sch Health* 1982; 52(5): 295-300.
- 31) Rector R, Johnson KA, Noyes LR. Sexually Active Teenagers Are More Likely to Be Depressed and to Attempt Suicide. 2003. <http://www.heritage.org/research/reports/2003/06/sexually-active-teenagers-are-more-likely-to-be-depressed> (2015年6月1日アクセス可能)
-

## Sexual behavior and associated factors among Korean junior high school students

Gyuyoung LEE\* and Seunghun SONG\*

**Key words** : Korea, junior high school student, sexual behavior, risk behavior

**Objectives** The study purpose was to identify the sexual behavior and associated factors of Korean junior high school students.

**Methods** Raw data from the 2013 Korean Youth Risk Behavior Web-Based Survey were used. Among the data from 72,435 students, 36,530 junior high school students were analyzed. Complex sample frequency analysis and complex sample chi-square were used to identify the condition of sexual behavior, and complex sample logistic regression was used to examine the factors related to sexual behavior.

**Results** Among the students, 3.8% responded that they had experienced sexual intercourse, and the prevalence of sexual intercourse was higher among male students (5.0%) compared to female students (2.5%). Among male students, those who had the following were more likely to have had sexual intercourse: perceived high economic status, living with a relative, experience with a part-time job, a foreign father, experience with smoking and drinking during the past month, experience with drug use, and depression during the past 12 months. Among the female students who were more likely to have had sexual intercourse, the following were ascertained: higher grades, perceived high economic status, living with a relative or in childcare facilities, experience with a part-time job, a foreign father or mother, experience with smoking and drinking during the past month, and experience with drug use.

**Conclusion** The results suggest that it is important to develop a comprehensive approach program not only focused on sexual behavior but also including mental health or other health behaviors to effectively reduce the likelihood of sexual intercourse among Korean junior high school students.

---

\* Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University, Korea